



院長の独り言

～ 漢方薬と新薬の違いとは ～



人の身体は外界と身体の内側から常に色々な攻撃にさらされています。外界からは病原体などの攻撃、内側からはがん細胞などの攻撃です。これらの多数の敵をやっつけ続けて初めて健康という状態が得られます。人は生まれつき病気で、生きるということは病気を克服し続けることだとも言えます。

身体の内側の敵を効率よくやっつけるために人間は薬というものを発見しました。薬のうちで敵を攻撃するタイプの薬、ある特定の測定値や検査値を下げるタイプの薬は理解しやすいと思います。病原体を攻撃する抗微生物薬、がん細胞を攻撃する抗がん剤、血圧を下げる降圧薬、悪玉コレステロールを下げるコレステロール降下薬などです。薬効を示す主成分は1種類です。西洋薬(新薬)はほとんどがこのタイプです。新薬の特徴は、新薬はいつでも薬だということです。降圧薬を例に説明しますと、降圧薬は患者さんの血圧に関係なくいつでも降圧薬です。つまり、高血圧の人に投与すると血圧を下げますが、正常血圧や低血圧の人にも降圧薬ですので、下げる必要のない血圧も下げて低すぎる血圧になってしまいます。患者さんは自分で調整ができないので、処方する医師が調整しなければなりません。

これに対して漢方薬は数十種類以上の微量な化合物の集合体です。それらの成分が多数の作用点を一斉に刺激します。その結果、非常に複雑だが、生命維持に必須のシステム、身体を攻撃から防御する免疫・炎症系、血液循環のかなめである微小循環系、細胞が持つ水の出入口であるアクアポリンを介した水の出入り、アディポネクチンが褐色脂肪細胞を刺激することで起こる熱産生系などが正常化する応答が引き出されます。漢方薬は新薬のようにいつでも薬なのではなく、患者さんが一定の条件を満たしたときだけ、システムを正常化させる応答を引き出し、結果としては漢方薬が薬として効いているように見えます。例えば、芍薬甘草湯はこむら返りにとっては薬で、腓腹筋を短時間で緩める応答を引き出しますが、こむら返りを起こしていない人に投与しても、微量の調味料の集合体のようなものが、身体にばら撒かれるだけで、患者さんは無反応です。



作用機序を説明する文章では、新薬は薬が主語で「この薬が〇〇に作用して、××のような効果が出ます」となりますが、漢方薬は患者さんが主語になり「患者さんが〇〇を服用しますと、××という応答が引き出されます」という見慣れない説明文になります。漢方薬は1個1個が薬とはいえない微量の化合物の集合体で、身体のシステムを正常化する、それ自身がシステムバイオロジー的な薬剤なのです。